

「開く」「拓く」「味わう」「伝える」 —日本建築設計学会の設立に寄せて—

一般社団法人
日本建築設計学会会長
竹山 聖
Kiyoshi Sey Takeyama



©photo by Jerry Huang

二〇一四年四月、日本建築設計学会（A D A N / Architectural Design Association of Nippon）が発足した。前身は「建築新人戦」を支援するK A S N E T（Kansai Architecture School Network）。

二〇〇九年に京都工芸繊維大学で開催された日本建築学会主催アーキニアリングデザイン展の併設イベントに端を発する「建築新人戦」は、三回生以下の学生が各大学の設計課題に提出した作品をプレゼンテーションし、これを教員審査団が評価する催しである。大学横断的な合同講評会という趣で、せっかくだから学生たちの励みとなるよう優秀作品に賞を授与しようということになった。企画から応募締め切りまでた

ったひと月という短期間に熱のこもった作品が全国から集まり、公開審査会もおおいに盛り上がった。二〇一〇年からは大阪に場所を移して今日に至っている。この支援教員のつながりをK A S N E Tと呼び、それが日本建築設計学会へと発展した。

あえて「日本」と入れたのは、「建築新人戦」の輪がアジアへと広がり、中国や韓国を代表する主催団体とも連帯が生まれ、アジアの建築設計を担う若者たちを、日本を代表して支援していく意気込みからである。

そもそものK A S N E Tの発祥は一九九七年に遡る。この年催された国際コンペ「二十一世紀・京都の未来」に合わせ、オーストリアから

またこれまで審査員となってくれた建築家や研究者にも、輪は広がっている。二〇一五年春の総会では、作家の平野啓一郎氏とピアニストで医師の上杉春雄氏を迎えて、文学と音楽と建築を語り合うイベント（ステージにはピアノも置かれる）を予定している。彼らも発足時からの会員である。つまり、いわゆる建築界の枠を超えている。文化として建築を愛する人々へと輪は広がりとつあって、それが嬉しい。

いま、文化として建築を愛する、と書いた。まずなにより、建築の魅力を多くの人々に開いていく、というのが、この会の精神なのである。文学を、芸術を、音楽を愛するのは、もちろん作家や画家や音楽家に限らない。であるなら、建築を愛するのが建築関係者に限られるはずがない。建築技術を知らなくても、図面が読めなくても、建築を愛することはできる。「開く」「拓く」「味わう」「伝える」という四つの指針を掲げている最初に「開く」をもってきたのはそのためだ。

次の「拓く」は、これまであまり光のあてられて来なかった建築の局面を照らし出し、その可能性を拓いていくことだ。もちろん建築には経済や政治や商業や社会の反映という側面はある。しかし、建築を文化として、理論として、学として捉え、より豊かに究め深めていく。建築

設計のもつさまざまな局面に光があてられるだろう。会員相互の切磋琢磨が期待される。

このように見れば、最初のふたつは、いわば外と内に向かう空間的ベクトルを示していることがわかる。そう、広く、深く、である。

さて三つ目の「味わう」。これは、建築を体験として味わおう、旅に出よう、という精神を現している。旅は実際の旅でも想像力の旅でもいい。そこで旅のアドヴァイザーの役割も期待し、（二社）日本旅行業協会（J A T A）会長で建築への愛も造詣も深い菊間潤吾氏にも会員となっていたいただいた。旅はともに旅した者たちの間に連帯感を育む。建築と風土や生活との関わりも実感されることだろう。ル・コルビュジエも旅によって建築へのまなざしを鍛えた。学生たちもまた旅を通して建築体験を深めてくれれば、と思う。

四つ目の「伝える」。これは日本建築設計学会の基本的な姿勢を伝える言葉だ。建築を設計するという行為は人間の「世界を改変する欲望」に根ざしている。それは本来的な欲望であり、だからこそ喜びに満ちている。われわれもまた、かつて先達たちから伝えられた建築の喜びを、世代を超えて伝えていきたい。豊かな建築文化が花開くためには、若い世代が夢を持って参入してきてくれることが必須の条件だからだ。若

い世代に夢を与えたい。そのためにも建築設計の世界が開かれ、拓かれ、味わうに値し、伝えられていかなければならない。

「開く」と「拓く」が外と内へ向かう方向性という空間軸だとするならば、「味わう」と「伝える」は横と縦の時間軸を表現している。水平的な時間を共有し、垂直的な時間を継承する。

この四つの指針を掲げつつ、その精神と姿勢に即したイベントを催し、機関誌『建築設計』や『建築設計学叢書』などの出版をおこない、旅を企画し、若い世代の才能を発掘し、そして建築設計のチャンスを手にとり与えてやれる社会への働きかけをおこなっていきたい。若手を鼓舞すべく「建築設計学会賞」を選び、またコンペやプロポーザルなどがより開かれた形となるような、しかるべき仕組みを提案していきたい。

日本建築設計学会の使命は、そうした精神や姿勢を行動で示し、次世代につなげていくことだ。建築設計の夢や喜びを分野や世代を超えて伝えていくために、為さねばならぬことは山ほどある。われわれもまたいくつかの団体に所属している。若手を育て、外に開く、という既存団体の取りこぼしがちな場所を拾い上げ、連携をとりつつ、手の届かぬところに光をあてて、丁寧に縦系と横系を織り上げていく仕事は、日本にもまだまだ必要なのではないだろうか。